
堕ちた英雄

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

堕ちた英雄

【Nコード】

N7976G

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

ゲーリックはそのチームになくはならないスラッガーで彼もチームを愛していた。しかしあるチームに金につられて入ったことにより彼の全ては狂ってしまった。残念ですが我が国の球界はこうしたお話に枚挙に暇がありません。

第一章

堕ちた英雄

彼はスラッガーだった。そのチームになくってはならない存在だった。

「僕はこのチームが好きなんだ」

そしていつもこう言っていた。

「だからずっといるよ」

「このチームに骨を埋めるんですね」

「勿論だよ」

満面に笑みを浮かべての言葉であつた。

「アメリカにも戻らない」

こうまで言つた。実は彼は日本人の選手ではなかつた。アメリカからの助っ人である。しかし日本での生活が長くなり日本語も完全にマスターしてしまつていた。

「絶対に」

「絶対にですか」

「日本にいるよ」

既に家族も日本に移つていた。

「そしてこのチームに骨を埋めるんだ」

彼、ステイブ・ゲーリックは断言した。長身でパワフルな打撃を誇る黒人の選手だった。濃い唇と強い目の光で有名である。そうした選手だった。

パワーヒッターだが身体つきは意外とバランスがよく来日したての頃は普通に守備もよく脚が速く強肩だった。今は流石に違つてきていたが。

チームへの愛情はこの通りであり日本一にも貢献した。しかしこのシーズン終了間際から妙な噂がマスコミから流れ出てきていたのであつた。

「あのチームにか？」

「ああ、そうらしいな」

最初に言い出したのは所謂マスコミゴロ達であった。駄文を書いて生きているつまらぬ輩達である。日本には多い人種ではある。残念なことに。

「あのチームにトレードだつてさ」

「あのチーム優勝できなかったからな」

「それでらしいぞ」

スポーツ新聞の片隅にこんなことが書かれだしていた。

「それでスカウトらしい」

「あのオーナーは何て言ってるんだ？」

日本で最も嫌われている人物である。その名はそのまま嫌われ者の代名詞にさえなっている、そうした札付きどころではない人物であった。

「あの人は」

「何でも乗り気らしいぞ」

「こつも書かれたのだった。」

「というかあのオーナーの命令らしい」

「ああ、そうか」

このオーナーはどこぞの独裁国家の將軍様の如く言われ続けている。

「それでか」

「あのオーナーの思い通りにならなかったことあるか？」

「いや、ない」

マスコミこそが最大の権力である。日本の現実である。

「じゃあ決まりだな」

「ああ、ゲーリッグはあのチームだ」

「来年からな」

すぐにこつ結論が出された。

「じゃあここから凄いことになるな」

「やっぱり日本の主役はあのチームだよ」

これがその独裁国家の発言でないとところが恐ろしいと言つべきであらうか。

「あのチームが勝つてなんぼだからな」

「全くだよ」

こんな馬鹿げた話が出ていたが当のゲーリッグは知らなかった。

そしてそのシーズンのチームとの契約に入ろうとすると。スポーツマスコミが急に騒ぎだしたのだった。

「ゲーリッグ退団か」

「交渉難航」

急にであつた。

「ゲーリッグ激怒」

「フロントも歩み寄らず」

事実よりも先の言葉であつた。

「あのチームへ移籍!？」

「来年は別のリーグにか」

「!？何、これ」

当のゲーリッグもこうした報道に困惑することになった。

「何で僕があチームに行くの？」

「あれ、そうじゃないんですか？」

「そう聞いてますよ」

ところが周りの記者達もしたり顔でこつ言つのだつた。見れば誰もがあのチームの親会社の某巨大マスコミの系列の記者達であつた。

「何かオーナーが来年貴方はいらないうて」

「オーナーってうちのチームの!？」

「はい」

こつ答えるのであつた。

「ですから。来年はあのチームですよ」

「二つのリーグでホームラン王狙つてるんでしょう？」

実は彼は既に今いるリーグで何度か三度ホームラン王を獲得して

いるのである。言わずと知れたスラッガーでもあるのである。

「ですからあのチームに」

「で、ゲーリッグ選手」

記者達の顔が急に下卑たものになった。いや、これは本性が出たと言つべきであろうか。仮面の下にあるその素顔がである。

「あのチームはですね」

「うん」

とりあえず聞いた。だがこれが。

「凄いですよ」

「凄いつて？」

「だから。これですよ」

その下卑た顔で手に指で円を作ってみせる。言わずと知れた金のことである。やはりその動作が何処かのしやもじを持って喚いている落ちこぼれ落語家の如く品がない。

第二章

「凄いですよ。一年で七億ですよ」

「七億!？」

「今ゲーリック選手三億ですよ」

「うん」

彼のその問いに対して頷いてみせる。

「そうだけれど」

「それが七億ですよ」

「七億」

当然ながら彼も七億がどれだけの価値があるものかはわかる。日本にいて長いからこそわかることだった。ただ二倍以上というわけではないのだ。

「しかもですよ」

「まだあるの!？」

「七億以外にもボークナスがあるんですよ」

「ボークナスって!？」

七億だけではないというのだった。

「ホームラン打つ度にですよ」

「ホームラン一本で」

日本球界最高のホームランバッターとされている彼にとってこれがかかなり魅力的な話なの言うまでもない。しかも記者はここでもまた囁いた。

「その額は二百万ですよ」

「じゃあ四十本打てば」

「八千万ですね」

「凄いな」

「打点やヒットにもちゃんと出ますし」

さらにであった。

「凄いでしょ、あのチームは」

「そこまでお金があるんだ」

「マスコミですから」

権力に金が集まる。まさにその言葉のままであった。もともと権力に集まるのは金だけではないのであるが今のゲーリッグには見えなくなっていた。

「だからですよ」

「うっん、凄いな」

「どうですか？」

にやにやと笑いながらまた囁いてきた。

「あのチームは。いいでしょう」

「うっん、けれど僕は」

彼はまだ迷いがあった。愛着に基くものである。

「今のチームが好きだし」

「少しの間だけ出張すればいいじゃないですか」

「出張」

「そう、お金は大事ですよ」

これまたあからさまな誘惑であった。

「そうでしょ？七億以上稼いで」

「七億以上……」

言葉がさらに揺れていた。

「しかもそれだけじゃないんですよ。今のチームって一年契約ですよね」

「そうなんだよね」

ゲーリッグは契約年数の話になると顔をさらに曇らせた。

「一年しかないんだよ。だから毎年ね」

「あのチームは複数年ですよ」

「複数年！？」

「凄いでしょ」

「複数年。じゃあ」

「そうです、二年で十四億」

「またしても金をちらつかせてきた。」

「プラスアルファもあって」

「ううん、じゃあ十六億は買えるのかな」

「そうそう、タイトル取ったらさらにボーナスが」

あくまで金のお話をしてくる。まるで全てが買えるかのようであった。この辺りの金の使い方は少なくとも他の国のマスコミにはないものである。

「二年でそこまでお金があったら」

「考えるのもいいですよ」

「確かに」

考える顔で記者の言葉に頷いたのだった。

「一生食べるのに困らないよ」

「お金は幾らあっても困らないですよ」

金から離れることはなかった。

「結論はじつくりと」

「そうだね」

虚ろな顔で記者の言葉に頷くゲーリックだった。そしてこの話から暫く後で。その悪名高きオーナーがまだゲーリックの契約の話が済んでいないのにこんなことを言い出した。

「ゲーリック？いいね、欲しいね」

この発言にネットは騒然となった。

「はあ！？あの爺今度はゲーリックかよ」

「また金積んだんだな」

皆もうわかっていたのだった。またしてもこの老人の評判は悪くなったがそれでもそうしたことが耳に入るような彼ではなかった。

まさに何処かの腐敗した独裁国家の將軍様である。

だが話はあのチームにとって有利に進んだ。ゲーリックは今いるチームとの契約が難航し何時の間にか破綻してしまった。そしてあのチームとの契約はすぐに済んだ。

「このユニフォーム、着たかったんだよ」

ゲーリッグは記者会見で得意満面の顔で言った。だがその会見の光景を見て笑っているのはあのチームのファンだけであった。他には誰もいはしなかった。

「精々今のうちに喜んでおくことだよ」

「今まであのチームにいつて幸せになったのいるか？」

何故か誰も金で入ってその末路はお払い箱である。不思議なことにあのチームに入って幸せになった人間はいない、少なくとも外様ではいなかった。

皆それを知っているからこそゲーリッグを冷たい目で見ていた。

だがマスコミはまさに独裁国家そのものの提灯記事ばかりであった。チームの優勝請負人とまで持て囃した。

そしてペナントががはじまった。ゲーリッグは打ちまくる。だがそれでもチームは低迷していたのであった。それは彼のせいではなかった。

「おいおい、やっぱりしゃもじはしゃもじだな」

「またボケ采配やってるぜ」

誰もが実際に采配を執る監督を嘲笑うした。

「あそこで走らせるか？」

「今の野球のピッチャーの起用わかってないだろ」

いつも采配ミスで負けていた。解説者やコーチとしてはいつも大言壮語を吐いていた人物であるがそれでも実際に采配を執ってみればこの有様であった。

第三章

「あゝあ、また負けたぜ」

「打つても打つてもな」

確かに打線は打っているがただホームランを打っているだけだった。史上最強打線という荒唐無稽で滑稽なまでに愚劣かつ浅はかな名称の打線はホームランだけだった。つなぎもなければ機動力もない。尚且つ監督の稚拙というのもおこがましい幼稚な采配の結果敗北が続いていた。そして親会社の不祥事というよりはそのオーナーの暴言の連続もあり新聞自体の発行部数も暴落していた。どれもゲーリングの責任ではないのだがそうした話にはならず何故か彼も批判されるようになっていた。

「あいつ優勝請負人だよな」

「いつもどうでもいい場面に打ちやがって」

あのチームのファンが口を尖らせていた。彼等は日本の中でもとりわけ薄情かつ野球について無知なことで知られている者達である。野球をわかっていない野球ファンであるのだ。

「七億も払ってこれか？」

「無駄金じゃねえか」

こんなことさえ平気で言うのであった。

「走るのも遅いし守備も悪いし」

これは歳のせいである。

「送球だって下手だしな」

一度ミスしただけで言っているのである。

「何なんだよ、あいつ」

「ホームランっていつでもソロだけじゃねえかよ」

「役立たずが」

拳句にはこんな言葉まで投げつけられた。

「あと一年いるんだよな」

「二年契約だからな」

「いらねえいらねえ」

知能も心もない罵倒はさらに続いた。

「これでホームラン王なんだからな」

「馬鹿な買物したよ」

勿論こうした話はゲーリッグの耳にも届いていた。彼はこのことに不快感を感じていたがそれを押し殺して己の野球を続けた。その結果彼はホームラン王になり打点もかなりのものになったがそれでもチームはBクラスだった。真の野球ファン達にとっては喝采ものであった。

「また優勝できなかったな」

「あいつは最高の監督だな」

また監督が嘲笑われていた。

「何時までも続けて欲しいよな」

「ゲーリッグもな」

これはあのチームのファンの自嘲の言葉であった。

「あと一年いるのかよ。早く辞めてくれよ」

「七億の置物だよ」

「邪魔だよ、邪魔」

優勝できなければこうした言い草であった。

「どれだけ凄いかって思ったらな」

「ソロホームランだけだな」

さらに言われる。

「あんなんでよく打点王なんて取れたよ」

「チャンスで打てよ」

打っているが優勝して、勝って当然と妄信している彼等にはわからないのだ。見える筈のものすら見えなくなってしまうのである。滑稽なことに。

「来年もあいつの顔見るなんてな」

「うんざりだよ」

これはネットでも書かれていた。当然ながらリーグもそれは見ていた。彼はそういう書き込みや噂を目や耳から入れて心中穏やかではなかった。

「僕は間違っていたかも知れない」

こう思いだしていた。

「今のチームに入るべきではなかったのかも」

だがもう遅かった。今はそのチームにいるからだ。

シーズンオフは全て彼の悪口ばかりであった。ネットだけでなく新聞でもテレビでも叩かれる。しかも擁護する者はごく僅かだった。

「あんなチームに行くからだろ」

「自業自得だ、自業自得」

よくこう言われたし書かれた。

「金に目が眩んだ結果だよ」

「あそこはあんなチームなんだよ」

「金が全てじゃないだろうにな」

彼が元いたチームのファン達もこぞって書いたし言った。そのチームは少なくともシーズンは彼が今いる金満チームよりは遥かにいい成績だった。優勝こそしなかったが。

「あいついらねえよな」

「戻って来るな」

「裏切り者はチームに戻るな」

「裏切り者………」

この言葉がゲーリッグの目に入った。丁度ネットを見ていてだ。

「僕は裏切り者………」

「精々あのチームでソロホームラン打ってるよ」

「来るな来るな」

誰もがこぞって彼を嘲り罵る。かつて彼を応援してくれた者達ですら。彼はそうした中でシーズンオフを過ごしてキャンプに入った。そのキャンプでも。

第四章

「おいおい、あいつ」

「ああ、置物だよな」

「太ったよな」

「デブがよ」

相変わらず後ろ指を差されて嘲けられた。

「あれで守れるのかよ」

「ソロホームラン打てば終わりってか」

「金だけ貰えればいいみたいだな」

こんな調子だった。実はそれ程太ってはいないのにそれでもこう言われ書かれるのだった。

キャンプの練習で三振をすればそれが携帯で撮影されネットに広がる。そのうえでさらに愚弄されるのだった。まさに悪循環だった。

「七億円の扇風機！」

「詐欺師！」

バッシングはエスカレートするばかりだった。

「とつとと日本から出て行け！」

「帰って来るな！」

「五月蠅い！」

キャンプの終了間近観客から言われて思わず叫んだ。

「このチームでプレイして何が悪いんだ！」

「金に目が眩んでだろうがよ！」

「錢ブタ！」

「何だと！」

品のない罵倒にさらに怒った。

「御前に野球する資格ないんだよ！」

「三振しても金貰えるなんていい身分だな！」

「黙れと言ってるだろ！」

思わず激昂してバットを叩き付けた。しかしその姿もまたネットで広められ完全に悪役になってしまった。無様な末路とまで言われた。

「僕が何をしたんだ………」

あまりにも叩かれ続け意気消沈する日々陥った。自然と酒浸りになる。

その中でオープン戦を過ごし開幕となった。だが精神的にどん底に陥っている彼に満足なプレイができる筈もなかった。成績は最悪だった。

「もう出て来るな！」

「球場に入るな！」

その心ないファンからの罵倒はさらにエスカレートしていた。

遂には球場前にゲーリッグお断りの看板がかけられ垂れ幕で日本から出て行けだの七億円の泥棒だの書かれた。拳句にはスタメンから外された。

そして彼はもう。こうまで言ったのだった。

「もうこのチームは嫌だ！」

チーム批判だった。

「大嫌いだ！このチーム！」

この言葉を叫び二軍落ちとなった。背遺跡を見てもこれは仕方がなかった。だがこの発言も野球ファン達からしてみれば自業自得でしかなかった。

「わかってただろうにな」

「童話みたいだな」

何かに目が眩んだ末路ということだった。

「本当にな」

「終わったな、ゲーリッグも」

「完全にな」

「もうな」

やはりそこには元のチームのファン達もいた。彼等の目は冷たく

厳しかった。その冷たく厳しい目で言葉を続ける。最早親しみ等は
何もなかった。

「引退するのかな」

「何か生活荒れて家族とも別居してるんだろ？」

「そうらしいな」

「プライベートのことも漏れてしまっていた。」

「あれは立ち直れないだろ」

「終わりだ、終わり」

「どうしようもないよ」

「さて、これで疫病神が消えたな」

「今のチームのファンはこんな調子だった。」

「後は優勝だな」

「置物がいなくなったからな」

だがチームは相変わらずの監督の幼稚な采配により低迷しこのシーズンも散々な結果に終わった。監督はこのチームではじめての監督としての優勝を経験していない、しかも通算勝率が負け越している監督となった。無能という烙印まで貰い追い出されるようにして辞任した。

そしてゲーリッグもまたこのチームを去った。二年契約ということもあり彼は次のチームに移ることになった。その彼が足を運んだチームとは。

「何しに来たんだ？」

「どの面下げて来たんだ？」

「まずは冷たい視線に迎えられた。」

「よくまあおおめおめと」

「恥知らずが」

「はつきりと聞こえるように言われた。」

「おい、後で玄関に塩撒いておけよ」

「通った後消毒しとけよ」

実際に玄関に塩が撒かれゲーリッグの後をこれみよがしに掃除さ

れる。完全に汚物、不吉なものと扱われている彼はそれでも建物の先に進んだ。そうしてある扉のドアを叩いたのだった。

「はい」

「僕だけれど」

まずはこう言った。

「契約のことで」

「いませんよ」

こんな態度であつた。

「そんな話は」

「そんな……」

「七億貰つたんだろ？」

扉の向こうから愚弄する声が来た。

「それで充分じゃないか。違つかい？」

「僕は野球が」

「あのチームでやれば？」

また扉から声がする。やはり周りの目は侮蔑しきつたものだった。

あからさまに嫌悪の顔を見せてきたり足元を掃除する者までいる。

「あそこで野球がしたいから行ったんだろ？」

「お金は」

「お金が全てなんだらう？」

こう返された。

第五章

「とにかくうちはいらないよ」

「いない……」

「邪魔だから帰ってね」

今度の言葉はこうだった。

「さつさとね」

「そんな……」

「自分の不始末は自分でつけてね」

言葉には続きがあった。

「少なくともこっちはあの時契約するつもりだったんだから」

「……」

こうして彼は門前払いとなった。後には皆の冷たい視線があった。それを背中に浴びつつ一人肩を落として出て行く。誰も同情しなかった。

その彼が契約を結べたのは元のチームと同じリーグにあるチームだった。だがそのチームはあまりにも不人気であり親会社の評判も極めて悪かった。裏であくどいことをしていると噂ばらの噂でチームの雰囲気も監督は暗愚で保身ばかり考え責任を選手になすりつけ采配は酷いものだった。そして選手達も練習でも士気はなく選手同士で反目ばかりしていた。球場ではアンチの野次ばかりがあり七億を出したあのチームよりも遥かに酷いものだった。

「へえ、あいつ今度はあそこか」

「あのチームに相応しいな」

「全くだぜ」

野球ファンはそのチームに入ることになったゲーリックをさらに嘲笑した。

「金に目が眩んだ奴にはな」

「丁度いいチームだよ」

ネットでも何処でもこう言われ書かれる。キャンプからオープン戦でも彼は叩かれた。記者達はもう誰も寄り付かずチーム共々叩かれるだけだった。いるのはアンチだけだった。

「故障しろ故障！」

「再起不能になれ！」

「離婚おめでとう！」

プライベートのことまで言われた。

「一人身になった気分はどうだ！」

「奥さんにたつぷり慰謝料払えよ！」

「その七億でな！」

最早言い返す気力もなかった。彼はいつも俯き一人で練習をした。グラウンドの隅で有り得ない程悪いと言われているデザインのユニフォームを着て素振りやランニングをするだけだった。表情も暗くなり動きも悪くなった。その彼にさらに罵倒や冷たい視線が浴びせられていた。

離婚したのは生活が荒んだからだだった。酒に溺れそれで妻子に愛想を尽かされた。彼は一人になると余計に荒れた。最早救いはなかった。

そのうえでペナントがはじまるがこんなチームが強い筈がない。五年連続最下位だったがこの年も開幕から連敗続きだった。そして十連敗して自分は四三振だったある日のことだった。

「駄目だ、もう」

彼は試合が終わるとすぐにベンチに座り込んだ。そのうえで沈み込み頭を抱え込んだ。その姿もしっかりと新聞に載りネットに広まった。

この姿をアンチ達はすぐに所謂アスキーアートにした。それはうちのうちにネット全体に広まった。何処までも叩かれ続ける彼だった。

「何故皆僕をここまで叩くんだ？」

遂にたまりかねてある日呟いた。

「誰も応援してくれないし何かあれば悪口ばかりだ。どうしてなんだ」

「それは決まってるさ」

飲み屋で焼き鳥でビールに溺れつつ言ったその時のことである。

カウンターにいるある客が彼に言うのだった。見ればゲーリックの知らないごく普通の中年のサラリーマンだ。

「それはね」

「決まってるって？」

「あんたは金であのチームに入ったよな」

「それは」

「それでだよ」

彼の方は見ない。冷たい声で言うだけだった。

「それで皆あんたを見捨てたんだ」

「見捨てた？僕を」

「そうさ」

サラリーマンはさらに言うのだった。

「あんたをな」

「けれど僕は」

「あんたは心があつた」

「心が！？」

「あの時はな。心があつた」

ビールをここで一杯飲んでからの言葉だった。

「野球に対してはつきりとした心がな」

「僕にはあつた」

「そうさ。けれどあんたはそれを捨てた」

またしても冷たい言葉である。

「金に目が眩んでな」

「・・・・・・・・・・」

「だから皆あんたを見捨てた」

あまりにも厳しい現実を彼に告げる。

「それでな。見捨てたんだよ」

「そんな。それで皆僕を」

「あんたは堕ちた」

彼はまた言った。

「完全にな。もう誰からも慕われないし尊敬もされないさ」

「僕はもう・・・・・・」

「さあ、どっかに行つてくれ」

このサラリーマンもまた彼に辛かった。

「あんたの隣にいたんじゃ美味しい酒が飲めないからな」

「・・・・・・」

「あんた次からは来ないでくれよ」

カウンターの親父まで言う。この店は彼の馴染みの店で親父とはいつも楽しく談笑していた。しかしその親父までもがこう言ってきたのだ。

「迷惑だからな」

「迷惑、僕が」

「そうさ、迷惑だ」

見れば親父は嫌悪感に満ちた顔をしている。その顔で彼に言うのだ。

「迷惑なんだよ。次から来るなよ」

「僕は。もう」

彼は遂にわかった。金で全てを失ったのだと。今ここでようやくわかったのだ。

彼はこのシーズンで引退した。そして一人寂しくアメリカに帰りそのうえで故郷でひっそりと暮らした。ホームランバッターのゲーリッグは完全にいなくなった。もう英雄は何処にもいなかった。

2
0
0
9
·
2
·
1
8

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7976g/>

堕ちた英雄

2010年10月8日15時53分発行